図書だより

令和６年１月
網干高等学校図書室

新しい年は、悲しいニュースと共に始まりました。次から次にニュースで流される映像に言葉もでないほど胸が痛みます。何気ない毎日が急になくなってしまう怖さをまざまざと見せつけられた年明けでした。普通の日々がいかに大事なものなのかということを痛切に感じました。今年で阪神大震災の日からも 29 年がたちました。いざという時の備えや避難経路を確認し、防災の意識と助け合う心を持って日々を過ごすことの大切さを再認識しましょう。

『想像ラジオ』
いとうせいこう・著

東日本大震災の後、聞こえてくる DJ の声。生きている者となくなった者とをつなぐかのような声。生きている人の視点ではなく、犠牲になった人の視点で描く物語。ヒロシマ、ナガサキ、コウベ、トウホク・・・亡き人の声を想像ししゃべり続ける魂の声の物語です。

『神の子供たちはみな踊る』
村上春樹・著

村上春樹さんが、阪神大震災の後に書いた 6 つの短編の短編集です。あの大きな震災のあと、直接関係のない6人の身の上に何が起きたのか。何が変わったのか…。
『かえるくん、東京を救う』という物語がとても有名です。

図書室にある震災関連した本を紹介します

『紙つなげ! 彼らが本の紙を造っている』
佐々木涼子

宮城県石巻市の日本製紙石巻工場は津波に呑みこまれ、完全に機能停止した。製紙工場には「何があっても絶対に紙を供給し続ける」という出版社との約束があるが、絶望的だった。その絶望から、工場の復興までを徹底取材したノンフィクションです。

『河北新報のいちばん長い日』
河北新報社，河北新報・編集

肉親を失いながらも取材を続けた総局長、犠牲になった販売店主、倒壊した組版システム、被災者からの非難、避難所から出勤する記者。それでも、「被災者と共に」あり続け、被災地の様子を伝えるために奔走した地方紙の新聞にかかわる人々の必死の思いを伝えます。

小論文のための参考図書

１月 19 日に、2 年生を対象に小論文講演会がありました。当日配布資料の「分野別推薦図書」のリストの中から、図書室に蔵書がある本を紹介します。

生活・社会
『豊かさとは何か』(暉峻淑子　てるおか　いつこ)

環境
『沈黙の春』(レイチェル・カーソン)
『いちばん大事なこと　－養老教授の環境論』(養老　孟司)

国際問題・異文化理解
『異文化理解』(青木　保)
『多文化世界』(青木　保)

日本語・日本人
『日本辺境論』(内田　樹)
『日本人とは何か』(加藤　周一)

教育
『子どもと学校』(河合　隼雄)

福祉
『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（伊藤　亜紗）
『自分の木の下で』(大江　健三郎)

科学技術
『生物と無生物のあいだ』(福岡　伸一)

医療・看護
『ケアを問いなおす　－〈真相の時間〉と高齢化社会』(広井　良典)
『新版　動的平衡　-生命はなぜそこに宿るのか』（福岡　伸一）

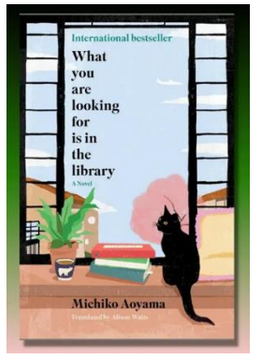
心理・思想・哲学
『失敗学のすすめ』(畑村　洋太朗)

そのほかにも小論文を書くための参考図書がたくさんあります。わかりやすいようにコーナーを新しくしました。
わからないことがあれば聞いてくださいね！！

青山美智子さんの『お探し物は図書室まで』が
アメリカの「今年の必読書 100」に選ばれました

アメリカの雑誌『TIME』では、毎年、世界各国で出版された本の中から、「今年の必読書100冊」(THE 100 MUST-READ BOOKS)を発表しています。100冊の中に、2021年本屋大賞第２位となった青山美智子さんの『お探し物は図書室まで』が唯一の日本人作家の本として選ばれました。「本の力」を希望に満ちた形で表現したことが評価されました。図書室にあるので読んでみてくださいね。

過去には、この「今年の必読書 100 冊」には、『夏物語』(川上未映子著)、『地球星人』(村田沙耶香著)、『地球にちりばめられて』(多和田葉子著)などが選ばれています。(3冊とも図書室には蔵書なしです…残念！)



『What You Are Looking For Is In The Library』
（英語ではこんなタイトルです。 ☝）

表紙の違い、タイトルの日本語と英語に注目！
下の文章は Time 誌に紹介された推薦文です。訳してみよう！

『お探し物は図書室まで』

Michiko Aoyama’s set of interconnected stories, translated from the original Japanese by Alison Watts, centers around a local library in Tokyo. There, librarian Sayuri Komachi makes recommendations to a variety of readers, from a college student looking to find purpose in her life to an accountant who is longing to open an antique store. These characters are all guided by different desires–and Aoyama captures them with empathy and an intense attention to detail, introducing fully realized people who want to change their lives for the better. The result is a refreshing and hopeful look at the power of books and the durability of dreams.

（The 100 Must-Read Books of 2023｜TIME より引用）

＊＊＊＊＊お知らせ　その①＊＊＊＊＊

１月の最終週から、２月のはじめまでが後期の図書委員さんの当番です。２月になると、３年生も自由登校になります。２年生、１年生は総合的探究の発表会や、学年末考査などあるため、イレギュラーな開館になります。1、2 年の図書委員は、あと1～2 回で今年の当番が終わります。図書室前に予定表を貼ってありますので確認してくださいね！

３月に入ったら午前中の授業になるので、２時間目あと、３時間目あとの休み時間には図書室を開館しています。春休みにゆっくりと本を読みたい人、前から読みたい本があったという人、休み時間は短いですが借りに来てくださいね！！

＊＊＊＊＊お知らせ　その②＊＊＊＊＊

図書室で使わなくなった雑誌をリサイクルします。少し前の本ですが、歴史に興味のある人、世界のあちこちに行ってみたい人、料理に興味のある人、見てくださいね。図書室前の廊下に並べています。ご自由にお持ち帰りください。

「図書室の本を読んでみた」日記　1

新しい本ばかりでなく、前からある本にもおもしろいものがたくさんあります。そんな本を少しずつ紹介していきたいと思います。

『横道世之介』（吉田修一・著）

舞台は 1980 年代、バブル真っ只中。もちろんスマホもない時代、長崎から大学進学のため上京した世之介は、おそろしく押しの弱い性格。それでも、大都会の中様々な人と出会い、笑い、恋をして、バイトに明け暮れる…そんな大学生の物語です。もしかしたら、お父さんお母さんの時代かもしれませんね。とにかく世之介がいいやつなのです。時代は違っても、変わらない気持ちを感じられたらといいなと思います。